

〈研究ノート〉

自己と世界の境界：Elleke Boehmer の場合

早川 敦子

I. 21世紀のポストコロニアル批評

Oxford 大学英文学科で「世界文学」を講じる女性教授 Elleke Boehmer (1961-) は、*Empire, the National, and the Postcolonial, 1890-1920* (2002) や *Colonial and Postcolonial Literature: Migrant Metaphors* (1995) などの著作で知られるポストコロニアル批評理論の論客にして、とりわけアフリカ文学の作家作品を研究対象にした文学研究者としても優れた仕事を世に出してきた。その関心の中心にあるのが、反／植民地主義或いは反／帝国主義の歴史的文脈の中で人間の経験がいかに言説化され、文学の書き手たちがたえず新たな表象を創造することを通して文化を牽引していったかという「言語」を介しての文化の創造だといえるだろう。

言語の界面において、例えば個人のアイデンティティは、内的経験から家族との関係性、社会生活での軋轢やさらには民族意識を表現する過程を通して、国家と人間の関係性の模索へとテキストを越境させていく。その文化の創造が、いわゆるポストコロニアル文学の源泉となって多彩な文学の領野を拓いたと Boehmer は見る (“Mothers of Africa: Representations of Nation and Gender in Postcolonial African Literature,” 1990)。とくに近年の彼女の仕事は、移民経験とアイデンティティの問題、そして見えない権力への「抵抗」をさまざまなコンテクスト—例えばインド独立運動を境として宗主国であった英国への移民経験が、英国の中でどのようなインド人共同体を形成したかを跡付け、それがひいては英国の文化形成に有形無形に貢献していった過程をオーラルヒストリーから拾い上げる (*The Indian Postcolonial A Critical Reader*, 2011)—から検証している。

そしてそのような国家と個人の大きな間隙を間の埋めるべく人間の現実

を照射していく試みの中で、「女性」の存在が立ち現われてくる。2005年にまとめられた *Stories of Women: Gender and Narrative in the Postcolonial Nation* (2005) は、ポストコロニアル理論にフェミニズム理論をリンクさせながら、男性作家たちが作り上げアフリカ建国のナラティブに利用してきた「女性像」を女性作家たちがいかに自身の手に回収し、書き換えていったかを読み解いている。Flora Nwapa や Yvonne Vera らの女性作家たちを Ngugi wa Thiong'o や Achebe に対峙させながら、アフリカの中にも多様に展開された建国の神話と現実のずれを彼女たちが修正していった過程を跡付けていく。彼女たちの作品がフィクションの力を発揮することで、「新たな国家」を想起させる想像力と、そこに協働するジェンダーの視点が新たな領域を拓いてきたことが強調される。その過程で「いかに独立の時代に国家の父／息子の物語と母の表象が、想像の国家を実現化するために使われたのか」と同時に、その後の世代が「女性だけでなく男性の作家たちもふくめて、過去に負わされた重荷から形を与えられた原初的な象徴を書き変えていった」(14) 道程に光が当てられる。

現代作家として Sarojini Naidu とインドの Arundhati Roy を並べて論じる Boehmer の視点は、植民地支配の構図をさらに広汎な歴史的体験に拡げて捉えるなかで、女性作家の力が未来に繋がることを示唆するものである。とくに Roy の政治的発言に言及しながら、文学が思想の媒介を担って女性たちの意識を内側から外に繋げていく役割をもつこと、それが「トランスナショナル」つまり国家を越えた領域に働きかけていくことを Boehmer は指摘する。

また、他方では、昨年編著として上梓した *Terror and the Postcolonial* (2010) は、9・11 後の世界地図の変位をポストコロニアルの見地から考察する 2006 年の英国でのシンポジウムを統括するものであるが、その中で Boehmer は、21 世紀におけるポストコロニアル批評が二つの方向性に展開しているとしてその意味の検証を試みる (“Postcolonial Writing and Terror”)。彼女によると、一方の極に「グローバリゼーションと異種混交性」に向かう方向性があり、他方に「抵抗」がある。前者はマジック・リアリズムの小説から喚起され、後者は「ネイションを巡る語り」を通して「国家の物語に形を与える」方向性をもつ (143)。「抵抗」に関わるポストコロニアル批評は、ここで「ヘゲモニー的中心と、その周縁の境界領域にたえず監視の目を光らせる」と同時に、「自身の意味と生存のために可能な代替と共存のありようを模索する」(144)。作家たちの言語による試みは、まさに「マジック・リアリストであれナショナルであれ、異なる様々の対話を介して生の継続の方法を探し、その営みは

たえず更新されながら反復されていく」(同)ものなのだ。このBoehmerの視点は、一貫してポストコロニアル批評の現代性とその意義を更新するもののだといえるだろう。その模索の道程は、さらに彼女自身の作家としての意識にも反映されている。

第一作は *Screens Against the Sky* (1990)、南アフリカを舞台に母と娘の葛藤を、70年代の時代の鬱屈とそこからの解放に投影させて描き出して高い評価を得た。続いて *An Immaculate Figure* (1993)、*Bloodlines* (2000)、そして *Nile Baby* (2008) と健筆を奮い、自身の研究者としての知見を経糸に、そして南アフリカで生まれて絶えず自己のアイデンティティを問い続けてきた一人の人間、そして「女性」としての意識を緯糸に織り込んで、「アフリカ」の表象を紡ぎだしてきた。小説という形態そのものを彼女が自身の言語経験の射程に招き入れていることは、後出のエッセー「ここでもそこでもなく：母語の外で書く」(2010)に鑑みればひじょうに興味深い。最新刊の短編集 *Sharmilla, and Other Portraits* (2010)のエピローグとして発表されたこの自伝的エッセーは、母語と新たに修得された言語の狭間でアイデンティティをたえず揺さぶられる自己世界と言語の関係性を照射するすぐれて現代的な論考としても読み解ける。とくにオランダと英国という二つの言語文化を背景にもちながら、南アフリカというトポスで少女期を過ごしたBoehmerは、ポストコロニアルの歴史の中に自身の立ち位置を探る荷を負わねばならなかった。そこに、ポストコロニアル研究者としての、そして同時に女性作家としての彼女の起点がある。

本稿では、翻訳理論を追ってきた筆者の関心に対してBoehmer自らが贈ってくれたこのエッセーを、再び彼女の仕事の文脈と繋げて読むことを目的に、研究ノートというかたちでそのエッセーの翻訳に取り組みたい。「翻訳は精読である」というスピヴァクという言葉ののっとなって、その精読の過程にBoehmerの真髓が立ち現われてくると思うからだ。

その前にいくつか付け加えておくべきことの一つは、今触れたようにBoehmerの言語的体験—彼女はこれを「アウトサイダー性」という言葉でエッセーの中で述べている—は、彼女独自の研究にさまざまな形で反映されながら、同時に母国語ではない言葉で作品世界を生み出してきた多くの優れた作家たちとの本質的な共通性をも照射しているということだ。

例えばポーランドからカナダに移住し、母国語を喪失した体験を自伝 *Lost in Translation: A Life in a New Language* (1989) で記したホロコーストの第二世

代の作家 Eva Hoffman⁽¹⁾は、新たに修得した英語という言語が自身のアイデンティティとの間に引き起こす亀裂を乗り越えることが、自身の半生であったと捉えている。逆説的な意味では、言語と自身の間の亀裂を意識化することが、Hoffmanの作家としてのアイデンティティの基盤となったと言えるだろう。自己と世界の剥離をもっとも顕著に照射するのが言語であるとすれば、言語との関係性の構築が、人間を世界に繋ぐ通路となる。それは他者と自己の関係性を意識化していく過程と重なる。Hoffmanの場合、その「他者」の存在を自身の中に発見しなければならなかったのだが、自身の中の他者性は、Boehmerの意識にも深く刻印された異質性でもあった。その異質性、他者性を言語によって表出していくことなくしては、外の世界に繋がる水脈を発見することはできないといっても過言ではないだろう。

とくに或る種のトラウマを負った人間—ホロコーストの生還者は、まさにそのような存在だといえるだろう—は、フロイト理論を待つまでもなく、一定の「遅延」を経たあとに表出される言語によって解放を得ることができる。Boehmerが「傷」という言葉で表現しているそのような「しこり」もまた、Hoffmanのいう「自己翻訳」という言語化のプロセスを経て受容され得たのではなかっただろうか。とくにBoehmerの場合、その「翻訳」は、植民地の歴史という文脈の中で自身の家族と体験を位置付けるものでもあった。いわば、「ポストコロニアル」的視座が彼女の言語経験の意味づけを可能にしたのである。人生を振り返ること、それを対象化すること、それは歴史の再読の行為でもあって、そこでちょうど彼女の上記の仕事そのものが示したように、過去の表象が更新されていく。単独の言語空間に帰属しない意識をもつ書き手たちは、ポストコロニアル理論の先駆者にして伴走者でもある Homi Bhabhaが提起する「隙間」(in-between-ness)あるいは Edward W. Saidが自身に課した「祖国喪失者」(exile)に通底する立ち位置ゆえに、所与の既成の「言葉」を転位させていくことができるのだ。

Nelson Mandelaの伝記に取り組んだBoehmerの仕事(*Nelson Mandela: A Very Short Introduction*, 2008)は、南アフリカの歴史をまた異なる角度から再読し、転位させる試みでもあったといえよう。自己を語り、他者を語ることの中で、Boehmerが言語と格闘しながら、ポストコロニアル理論を更新しているのはたしかだ。

II. “Here nor there: writing outside the mother tongue” (by Elleke Boehmer) 試訳

「ここでもそこでもなく：母語の外で書く」

彼には、自由に操ることができる英語という言語がある。彼自身が信念をもって忠実であろうとする英国という国、そしてその英国が意味するあらゆるものがある。しかし、明らかに、真に英国人であるとして受け入れられるためには、自身も通りはしないとわかっている厳しい条件をみたさねばならないのだ⁽²⁾。

1939年 W.H. オーデンは、W. B. イェーツを悼んで「狂気のアイルランドが君を傷つけ、詩へと向かわせたのだ」という率直な言葉を残している。アイルランドに住むイギリス人として、イェーツはアイルランド語を学ぶ真摯な努力にも関わらず終生単一の言語にこだわり続けたが、オーデンが言うように、詩や物語の伝承から自身が思い描いた魅惑的なアイルランドの像に囚われていた。苦い幻滅を経験しつつも、彼は作品の核にアイルランドという「国家」の精神を注ぎこんだ。

イェーツについてオーデンが言っていることを援用させてもらおうと、親英的なオランダ人だった私の父は、私を「傷つけ」、形式ではなく言語としての英語に私を向かわせた。それがもっとも正確な表現だろう。そして、結果的に私は詩ではなく散文でものを書くようになった。イェーツとの類似があるとすれば、それは、まさに「傷」ということばが示す深い経験に集約されるだろう。私は決して単一言語主義者ではないし、それゆえにたった一つの国家を精神の支柱におくことなどできるとは思わない。ただイェーツについて一つだけ気になることがある。他言語に耳を塞いで詩作を続けたアイルランドの英国人詩人であった彼が、もしアイルランド語を使いこなすことができた（文字どおりマスターするという意味で）としたら、あのようにずば抜けて「アイルランド語」の本質に響き合う、音楽的な要素を掬いとった詩を生み出すことができたのだろうか、ということだ。考えてみるだけの価値はあるだろう。

英語の非母語者でありながら英語でものを書いてきた私は、子ども時代の「傷」に思いを巡らせて、一つの言語の外からものを見てきた経験の特異性を考えてみようと思う。英語は、私にはものを書くにはもっとも自然に感じられる言語ではあるけれど、本質的なところで完全に自分の言語だとはいえない。まず始めに、私自身の言語的な孤児としての—私は自分の特異な言語

的経験は、孤児のようなものだと感じてきたのだ—複雑な背景を明確にしなくてはならないだろう。もう英国に暮らして二十数年たつが、私はいまだに、なにかの話題や書物で言及されたり、或いは多国籍的なインターネット上では、「南アフリカ」作家として認識されている。たしかに、私が生まれ、人生のいくばくかの歳月を過ごしたのは、南アフリカ—芳しい南国の地ダーバンの海辺—だった。しかし、自分を厳密な意味で南アフリカ作家と呼んでいいのかどうか、現実的にも感情的にもじっくりこないものを私はずっと感じてきた。そして姓についていえば、ゲルマンのウムラウトをつけない Boehmer という名前は、du Biel or Heine という「南アフリカ」特有の名前のようにアフリカに始原をもつのだろうか？私のアイデンティティをめぐるこういった漠然とした疑問は、アパルトヘイト下の南アフリカのアイデンティティそのものが抱えた人種的亀裂によって大きな影響を受けた文化と言語に関わるものだったし、それは屈折した私自身の二つの言語性にも無関係ではなかった。

私はオランダ人の両親のもとに生まれた。初めての子ども、しかも一人っ子の私を授かった煌めく灼熱のアフリカの地で、母は意識的にずっと異邦人であろうとした。それに対して父は、母国と母国語を離れた地を、自分の居場所として積極的に受け入れていた。また後ほど彼の話に戻ることにしよう。

子ども時代に、陽が照りつける前庭の芝生で母と遊んでいたときのこと、オランダの行進曲と一緒に歌ったことが最初の思い出の一つだ。その歌は、とても興味深いことに、一群の白鳥(言葉としての原語 *zwanen* は、航行する船のコードでもある)が英国に泳いでいこうとするのだけれど、入港を拒まれるという歌詞のものだった。歌いながら、この拒絶を真似る動作をするのだ。オランダ語を話す友だちとの幼い頃の遊びは、この記憶のように、いつも決まって祖国から遠く離れてしまった母親たちのオランダの歌や詩の薄紙に包まれて、歌詞の中にもどこか痛みを感じさせるオランダの節が滑り込んでいたのだった。オランダ人の仲間うちで遊ぶ子どもたちを迎えに来てはその戸口で会話を交わす母親たちは、異国のうだるような暑さの中で私の母が付き合っていた唯一の知人たちだった。むろん、彼女たちにとっても、母は数少ない仲間だったにちがいない。そして、私の母もその中の一人だったが、今も存命している彼女たちのほとんどは、母国オランダに帰国した。オランダは彼女たちの世界の基軸だったのだ。文明の源(移民をかくも寛大に受け入れた証人)、美(もちろん絵画の黄金時代)、最高のお菓子(英国にも追従を許さない)の中心ただただでなく、もともとの帝国主義の権力の中核でもあった(この点でも英国はオランダに学んだのではなかったろうか?)。

ダーバンの繁華街で、女学生のような軽い英語のアクセントで買い物をすることは、母にはいつも居心地の悪いものだった。優越感の一方で、母は英語の話者のあいだでは「資格ありとみなされる」ことに満足していた。私たちの小さな移民居住区では、母にはありがたいことに英語に頼らねばならないような状況はほとんどないに等しかった。私も、南アフリカであろうが英国であろうが、或いは何年か暮らしたカナダであろうが、英語を話すときにはいつもイギリス英語のアクセントで話してきた。それが私の「言葉」の特徴でもあった。つまり、どこにも位置づけることができない私の英語、資格ありと見なされるための関門、そして私にとっては「南アフリカの作家」というラベルに大きな「？」をつける理由となる英語という私の言語なのだ。

しかし、オランダが私たちの移住世界の中心で、英語がいろいろな意味で「あとからやって来たもの」でしかなかったとしても、両親の家では、アフリカーンス語を南アフリカの近しいとこ—或いはオランダの娘の言葉とまでいえるかも知れない—として受け入れることはなかった。受け入れるどころか、現実はずっと反対だった。英語に対する居心地の悪さとは全く別のところで、母はアフリカーンス語の領域に入り込んで言語的なスノップになろうとはゆめにも思っていなかった。黒人や有色のアフリカーンス語作家たちがその独自性に光を当ててきたように、もともとアフリカーンス語は、初期のオランダ人船乗りや入植者たちによってケープに広く撒種された言葉で、母にとってそれは「下の階級」が使う野蛮な“*keukentaal*”という言葉で、やがて奴隷の歴史を通じて貧困や媚びへつらい、そして墮落の色合いを帯びていったものに映った。私は厳しくアフリカーンス語を使うことを禁じられた。絶対にだめだと。私たちの食卓に、南アフリカのチャツネ、ブラッチャンがのることはなかった。子どもたちが口を滑らせて「アフリカーン的な」言葉一ぎこちない二重否定や三人称の言い回し、「みっともない」土着の言葉の短縮形などなど—を話そうものなら、母やその友人たちは言葉じりを皮肉たっぷりにとらえては、私たちの言葉のフィルターをかけた。アフリカーンス語は、力のある文化遺産のかたちを表すものであっても、依然として貧しく、靴もなく歩き回っている野蛮な「白人のゴミ箱」の者たちの言葉だったのだ。

ダーバンの黒人ズルー族が話す多数言語、ズルー語についていえば、私たちの言葉からはとうてい理解することができない「困難」な言葉だという認識があった。それなりに彼らにとっては意味のある言葉なのだろうと尊重しながらも、自分たちの言語とはまったく無関係なものとして完全に分離されていた。ズルー語を話すのは、使用人や庭師の「少年」、家の掃除を

する「少女」、つまり私たち自由なオランダ人移民の意識にはまったく入ってこない人間たちだった。他の白人たちのもとで使用人として雇われていたズルーたちは、あたたかな午後に草地の端っこにたむろしては、お互いに親密な様子でおしゃべりに興じ、独特の抑揚が漏れ聞こえてきた。

オランダ語は、いまにして思うと、私が最初に意識野を形成するときに、その媒介或いは仲介を担う役割を果たしてたのだ。いまだにオランダ語は、私がものごとを理解するときの基礎となる内容物であり、私の思考が積み重なっていくときの一番下の敷物になっているように思うのだ。想像を羽ばたかせて過去を掘り下げ、意識的に作り上げてきた人生の大部分を剥ぎとってみると、英語そのものが存在しない世界を思い描くことが可能になるかもしれない。しかし、オランダについては、同じようにはいかない。想像できないのだ。私が二つの言語の両方において、差異はあるにしても等しく違和感をもたずに自分自身を捉えることができたにしても、オランダ語は意識しうるすべてのものの根っここのところに存在している。その根の上に、いまや深くさらに充溢して他の言葉が重なって育ってきているのをしばしば感じることはあっても、端的に言えば、私には、「海」を意味する英語の sea は、究極的にはいつもオランダ語の zea、「怒り」rage は同様に woede なのだ。

オランダの外にあった私のオランダ語も、そうやってアフリカンス語と混ざり合うことはなかった。もちろんズルーとも。南アフリカの公用語で「ヒンズータニ」と呼ぶ、ダーバンの大きなインド人の共同体で話されていた言葉とも、遠く隔たっていた。父に関しては、オランダ語もアフリカンス語も、ましてやズルー語も、まったく何の影響ももたらしはしなかった。父が選択した英語という言語が、他の言語の優位に立っていたというだけのことではない。世界を征服した英語が、私たちみんなが世界の広がりの中で息をしている空気の一部だということでもあった。これを言うといささか問題かもしれないが、敢えて工夫して表現するなら、父はダーバンのインド人たちの料理を称賛して真似てみようしていたのだ。彼らの礼儀正しさを特徴づけているのが、父が言うには「すべて正しく」「整然と」した英語だったのだ。

父の話す英語は整然とした英語で、彼の愛読書だった『ロジェの類義語辞典』から類推するに、大げさに言えば中世ラテン語の多音節がとところどころに顔をのぞかせていた。しかも母の英語にくらべれば、まさに強いアクセントを伴っていた。父は大きな声で、英国的とは言い難い、むしろオランダ人特有か、あるいはいかにも外国人といった大仰さで英語を話したが、それはどことなく伝記作家が描くコンラッドを彷彿とさせるものだった。しかし、

とりわけ東洋への関心もその一つだったが、父は他にもコンラッドに共通する興味をもっていたし、コンラッドが英語に対して意識的だったのと同様に、父も英語にはさんざん苦勞していた。彼にとって英語をものにするのは、誇りの証だったのだ。書く英語は、なんとも形式的で堅苦しく、再び大げさに言えば、まさに第二言語が自然に身についたのではないことが一目瞭然とわかるような英語だった。しかし、話し言葉としての英語を媒介にして、父の英語への愛情、そして文化への傾倒、英語話者としてのアイデンティティが形をなしていったのだった。父は全精力をそこに注ぎ込んだのだ。そして、まさにこの正統な英語の獲得、「女王の英語」、「美しい」キング・ジェイムズ版欽定訳聖書の英語をものにするへの情熱ゆえに、彼は娘の将来に画期的な人生の転機を与えることになったのだった。

私が四歳になるかならないかの頃、父は突然私にオランダ語ではなく英語で話しかけ、私にも英語で話すようにと命令した。「わたしの言うことがわかるかい？これから家では英語で話をするんだよ！」それからというもの、私が父との会話の中でオランダ語の単語をポロリと漏らそうものなら、彼はまったく聞こえないふりをした。私が英語できちんと言い直すまで、父は頑固に私に背中を向けて、私の存在を完全に無視したのだった。じっさい、正確な英語を身に付けたことで、学校に行つてすぐに割り振られた補習授業から救出されたのは事実だが、父が私に向けた背中が、私には最初のうちはまるで肋骨にパンチを食らったような厳しい試練を表していた。

今のいままで、私は父がどうして豹変したのか、その理由を正確に言い当てることはできないでいた。それは、言語的な傷の刻印だった。子ども時代に感じた鋭い痛みがそのあとにも尾を引いて、父と私の関係はある種の緊張を孕み、父には感謝しなくてはならないのだと後になって納得したものの、そこで親子の分離が起こったのだった。父は、けっきょく学問とは無縁の人だった。厳密に言えば、正統な教育を受けたわけではなかった。文学ゆえに言語を愛したナイポールの登場人物ビシワスではなかった。ディケンズの小説に出てくる街の通りや、シェイクスピアのソネットの精緻な構造とも無縁だった。父は、私の母より前にいた二番目の妻から贈られた緑色の装丁のシェイクスピア叢書を持っていたが、『みんなの数学』や『荒れる海』、そして父にとっては必需品だった『ロジェの類義語辞典』に並んで本棚に収められた叢書はどれもみな黄ばんで読まれた形跡もないまま色あせていた。英国人の鼻もちならないスノップさや雰囲気、上品さ、そして頑固な「こだわり」を、お酒にまかせて本音を吐けるとなるとここぞとばかり並べ立てたりもした。

戦争中に別の男性と恋仲になって離婚した最初の妻は、その恋人同様「エグレス人」だった。英語への特別な感情のもう一つの理由でもあったろう。

それでもおおむね、そしてほんの少し飲んだくらいなら、父は英国と英国らしさを賞賛してやまなかった。当時の英国といえば、法の統治と正義、公平さと余裕、動じない周到さと一致団結の力を表していた。「一致団結した」正統性、まさにそれこそが父の英語への情熱の核にあるものだった。父の情熱は、英国の大きな船や、戦争と戦力、国を守る力とウィンストン・チャーチルに向けられていた。

父は若い頃、シンガポールやマレーシアなど、極東のあちこちの港で働いていた。これは明らかに、コンラッドという英語話者の作家が書いた正真正銘の半生の物語ではないにせよ、少なくともロード・ジムを想起させる話だ。家族の事情と、冒険に憧れる若者らしい野心に燃えて、父は祖国オランダから遠く異国に飛び出していったのだ。オランダは、当時の父にとって世界の周縁の国、広く外に開かれることを警戒している国のように映り、なにより耐えがたく臆病に感じられた（第一次大戦でオランダはずっと中立を貫いた）。第二次大戦勃発時には父は遠く故郷を離れ、それは彼にとって道徳的な慰めになっていた。そう私が想像しているだけでも知れないが、使命に呼ばれているように感じて、父はヨーロッパに戻った。1940年5月のオランダ侵攻時に、父はポーツマスに向かい、フリース語の *Tjerkhiddis* という名前を冠して 戦争中航空母艦 *Arc Royal* につき従っていたオランダの駆逐艦に乗ってインド洋やベルシャ湾に進軍していった。そのような状況下で、英国と英語は、父にとって何よりもまず同盟国と帝国を意味していた。父は、インド独立運動が渦巻くボンベイの様子を語った。東ティモールでカミカゼの爆撃に遭遇したときのことや、オーストラリアの北の海岸に飛んだことを詳しく語って聞かせたりもした。その危機的な時代に、チャーチルの演説の一字一句がどんなに国を高揚させ、励ましたかを語った。彼には、英語はシェイクスピアの言葉ではなく、チャーチルの、そして苦難に遭ったヨブの言葉だった。私に「完璧に」語らせようとしたのは、そんな言葉だった。英語の補習校に通っていた頃、私は集会で聖書の朗読をする役に選ばれたことがある。父はどんなにか誇らしく思ったにちがいないが、それははおくびにも出さなかった。他ならぬ自分の娘が「当然のように」キング・ジェイムズ版欽定訳聖書を完璧に朗読するのは、「自明のこと」だったのだ。

しかし、完璧に英語を読めることが、私を英国人もしくは南アフリカ英国人に、或いはなにものでもあれ然るべき信頼にたると見なされる存在にしたわ

けではない。まさしくこの「英国人より英国人らしい」英語を話すということこそが、初めから私自身の言語的アウトサイダーという感覚をもたらしたものだ。私は父の基準で「資格ありと見なされる」ために、両の手で彼が価値を置く「英語」を懸命に掴み取ろうとした。まだ十代そこそこで、私は嬉々として英作文の課題ひとつにも、整然と正確な英語を使おうと取り組んだ。英語は、オランダ語の膠着した堅苦しい言葉とは大きく隔たる言葉だった（『ロジェの類義語辞典』の扉は、文字通り閉ざされたままだった）。「正しい英語」を話す人間だと、周りにごく自然に受け止められていることに誇りを感じていた。13歳か14歳で、私は必死で自分の言葉に痕跡が残っているオランダ語特有の母音を消し去ろうと努力した。

それでも、このような努力にも拘わらず、自分が「真から」内容のある英国人の流儀には「ぴったりとはまっていない」ことを感じていた。英語話者の人たちが、自然に私たちのところに「立ち寄る」ことはなかった。「エゲレス人」がたむろしているところに「突入」することを私たちはしなかった。そのような場所、たとえば地域の石造りのイギリス国教会の教会や、田舎のパブ、クリケット場などは、彼らにとって明らかに自分たちの居場所だった。そのように彼らが自分たちのアイデンティティの領域だと認識している場所に私たちが無神経に踏み込んでいったら、決して歓迎されることはなかったろう。私たちには、何から注文をすればいいのか、バーではどの飲み物を頼めばいいのか、そして英国流のゲームの難解な終点がまったく分からなかった。「英国の」アイデンティティの袖に腕を通したところで、私の努力にもかかわらずチクチクと皮膚に違和感が残るばかりだった。

根本的なところではっきりしていたのは、私たちの人生は翻訳の中で、境界線のところに存在していたということだった。しかし、そのことを現実として理解するには長い時間がかかった。私たち家族が社会的に孤立していたのは、父がお酒が過ぎると怒りっぽくなる性癖や、母の極端な人見知りや、私自身の不器用な堅物さのせいだと思っていた。父が末期癌で人生の終焉にさしかかってようやく、私は自分たちがなぜずっとアウトサイダーだったのか、その理由に思い至ったような気がする。父は緩和モルヒネの作用で、意識から英語を失ってゆき、日常的なコップやスプーンという簡単な言葉や、入浴や食事といった日々の身体的な営みをオランダ語で表現するようになった。

私が思うに、この経験は二ヶ国語やさらに三ヶ国を話す人たちも、概して異なる言語に完全に同化したと感じていないこと、どんな言語であれ外国語を完璧に修得して自分のものになったという意識をもっていないことを示し

ているのではないだろうか。彼らは言語的にここでもあちらでもないところにいる。夜遅くなると、私の英語が文法的に正しくなくて、荒削りに聞こえてくるのを感じる。ここにきて、私は自分の英語がやたら分詞構文を使っていることに気づき、そしてまた「借りる」と「貸す」といった言葉にどの方向を示す語句が適当なのか(私からなのか、私になのか、とか)、もっと注意して使わなくてはならないと思うのだ。自分のものにはなっていないというこのような意識は、最初父が私に英語を使うように強いた時の憤懣やる方ない不条理感から生じ、それからは英語話者の世界で自分が試行錯誤しながら苦労を重ねてきたことによるのだと思う。いっときカナダで暮らし、今は英国で生活している中で、時折私は突如として英語という言語にいいようのない遠さを感じたことを思い出す。もっと正確に表現すると、英語という言語は、植民地化という個人的かつ世界的な連続性の歴史の中に私を絡めとってきたのだと思う。最初に英国に移住して二年というもの、私はバスを待つ行列の中でも店先でも自分の言いたいことを簡単な文章で伝えるのにもひどく苦労した。「買い物、袋に入れて頂けますか?」「このバスに乗る切符はおいくらですか?」まったく英語を母語とする人間の言葉とは程遠い言い回しだ。言葉を最初から学びなおしているような感じで、まさに自分を翻訳する営みだった。

それでも、オランダ語という私のももとの「根っこ」にある言語もまた、年を重ねていく中で自分にふさわしいように育ってはいかなかった。いわばその反対だった。オランダ語は、夢の中の言葉、突然何か特別な意味をこめたいときの言葉、或いは自分の内面で正確な言葉を見つけられないような感情を表現する言葉の領域にとどまっている。オランダ語で表現できたことを英語で言えるようになるには何年もかかった。ライデンやアルネムにいる親戚は、私の「魅力的な」BBC 英語の完璧な使い方を認めるのと同じように、私の話し言葉が生来の母国語の響きを伴っていることを指摘する。しかし、彼らがそのように指摘するということは、何かが、どこかが違うとうことの示唆でもあるのだ。どこかで基本的な言葉の法則が破られているのだ。私のオランダ語は、子ども時代の遊びや個人的な領域の言葉のままで、成長をとめてしまった。私は21世紀にそぐう現代的な言葉の用い方を知らないのだ。私の語彙は子ども言葉のままで、1950年代に両親が使っていたもはや時代遅れの言葉の模倣でしかない。オランダでも、私はそこが自分の居場所だと感じることはない。もし本物のオランダ人と問われれば、私はもちろんその枠には入れない。

一つの言語を選択的に使って作品を書きながら、他方の言語で深く思考するバイリンガルの作家は、幅の狭い本棚に、小さな軽いブックエンドの間に押し込められて窮屈そうにしている大きな本のイメージにもたとえられるだろう。ブックエンドはいつも本を支えきれなくなって落ちこちそうになっている。いつかは均衡をくずして、本はブックエンドもろとも落ちこちるかもしれない。どんなふうにしても。それでも、なんとか危うい均衡を保ちながら、まっすぐに本棚の上に立っている。そこには、或る均衡の力学があるのだ。特別な法則があるわけではないが。それでもなにかしら均衡を保つものが作用している。何かを支えているのだ。均衡関係そのもののなかに、目に見えない秘密の力があるのかもしれない。両方にあるものが、お互いに重みをかけあって働く力だ。それは、或る一つの言語の中に存在するあらゆる言葉が、他方の領域の言葉の影を帯びているという事実の中にも働いている。海 sea が zee の影を帯び、怒り woede が rage の影を帯びているように。そして、言語 language は taal の。

Ⅲ. 自己と世界の境界：文学を読み解く視点

Boehmer は、自身の言語体験を「傷」として語りながら、内面に深く沈潜する痛みを「ここでもそこでもない領域」の言語空間を介して歴史の世界地図に繋げている。ポストコロニアル批評に思考の回路を見出していったのは、そのような意味で彼女にとっては自明の理であったといえるだろう。彼女のポルトコロンアル理論に Bhabha との共振を感じ、小説に彼女が先のエッセーにも引用している Coetzee に共通する心象風景を垣間見るのも、たえず自己の他者性を顕現させていく視点ゆえではないだろうか。そして Boehmer は、自身のそのような感覚を文学の中に発見することで、孤独な空間から他者と共有しうる領域へと越境する契機を得たのだと思う。

言語的な「傷」を与えられたことで葛藤を感じるようになった父親が末期癌で逝ったことはエッセーでも触れられているが、父の最期は娘の人生に大きな転機をもたらした。父が死と向き合う限られた時間の中で、当時医学生であった Boehmer は、「医学は人間を救うことができない」現実と直面する。「彼には物語が必要だった。物語にしか、彼を救うことはできなかった」と彼女は述懐する⁽³⁾。その経験が、彼女をして文学研究の道へと大きな転換を遂げさせた。その彼女が博士論文で取り組んだのが、アフリカ文学における「母親」像の表象だった。

「母国」南アフリカへの複雑な思いを解くために、彼女は植民地という歴史的な文脈のもとで国家のアイデンティティを問いつけた作家たちの意識を掘りあげることを通して、彼らが創造してきた「アフリカ」の表象をいまいちど自身の立ち位置から検証することを必要とした。そして彼女は、表象のなかに囚われた「女性たち」が、自ら声をあげた女性作家の作品を通して解放されていった道程を見出したのだ。1990年8月21日にOxford大学St. John's Collegeに提出されたPh. D. 論文“Mothers of Africa: Representations of Nation and Gender in Postcolonial African Literature”に、彼女の以後の仕事の初発となった研究成果が結実している。タイトルが示唆するように、Boehmerはポストコロニアル文学を通して、脱植民地化の時代に新生アフリカが新たなネイションの確立に向けて構築していった「ナショナリズム」をジェンダーの視点から問い直す。

国家形成の主体は自ずと男性と「父と息子」の物語であり、「母」なる大地を象徴する女性は或る種の「アイコン」としてその主体なき表象の中に刻印された。論文の前半では、アフリカの国家形成においてこのようなステレオタイプ化された女性の表象が、新たな国家的アイデンティティを希求していく「男性性」のプロットに伴走して創出されていった過程を追う。たとえばPeter Abrahams、Leopold Senghor、Camara Laya、そしてNgugi wa Thiong'oらの作家たちに光を当て、「父としての国家」が家族の物語を通して概念化されていった言説を読み解く。背景にはBenedict Andersonの「想像の共同体」が透視され、文学がその「想像」を言説化していく過程こそが、文化的社会的ナショナリズムを牽引していった時代そのものの反映であることが示唆される。その文脈の中で、文化を創出する芸術家としての意識がWole Soyinkaの劇作にも表されてくることになる。アフリカにおけるモダニスト作家が、ここで登場してくる。その水脈に、国家の大きなナラティブから個人の存在を引き出していくChinua Achebeやさらに次世代の作家たち、たとえばBen OkriやFestus Iyayi、さらにTsitsi Dangarembgaが連なってくる。

じっさい、国家形成の過程はアフリカの中でも国によって大きな広がり多様性を見せているのだが、それは文化的歴史的多様性として文学の多様性にも如実に反映されている。まさにアフリカのポストコロニアル作家たちを紹介するBoehmerの後の仕事は、すでにこの論文の執筆を通して胚胎されていたのが見て取れる。そのようななかで、女性の作家たちの姿を目に見える形で掘りあげていった意義はとても大きい。

論文の後半では、そのような女性の作家たちの胎動に焦点を当て、彼女

たちが感じる現実との「違和感」、そして神話化された女神の女性像との隔たりを文学の中から読み解いていく。たとえば Flora Nwapa, Buchi Emecheta, Mariama Ba や Bessie Head らの作品を繊細な女性の感覚で捉える視座は、おそらく Boehmer の共感と文化的理解なくしては不可能だっただろう。彼女独自の視点から、女性作家たちが「アフリカ」文学という大きな文脈の中に姿を現わしてくる。Boehmer 自身が「英語」という言語でものを語ろうとして「袖を通してチクチクとする違和感」をときに感じないではいられなかったと記す、その違和感は、変わりゆくアフリカの姿を女性の領域から見すえた女性作家たちの感覚と微妙に響き合っているのだ。彼女たちの作品は、いまいちど主体を自分に取り戻す過程を経て、その違和感から現実を自分の感覚に沿うものとして捉えなおす言説を生み出した。第二世代に至ってその徴は「全体をふたたび夢みて、傷のいやしを求める」(“Mothers,” i) 言説となって、文学という言語空間だからこそ可能な「現実」を表現していくことになる。

文学の読解を、このように Boehmer は自己と世界の境界を越境していく動的な営みに連動させて呈示している。彼女はポストコロニアル文学が、歴史的時間の推移の中で人間の自己と世界を繋ぐ役割を負っていることを、次のような言葉で表現している。「物語は『実践の理論』として読み解かれることが可能だ—それはつまり人間の存在のありようを規定し、それを更新しながら創出していくということだ。ポストコロニアル文学は、それが国家主義的なものであるかどうかは関わりなく、多層的な文化的シンタクスとしての間テキスト性の概念を応用して捉えるのがもっとも有益だろう。ナラティヴが、或いはナラティヴを通して、他の領域からもたらされたものと、もともとそこに存在していたものが交叉して、そこから新たな現実が創出されるからだ」(“Mothers,” 18)。また別のところでは、「物語は個人の人生の意味に秩序を与え、自己と自分が生きる世界の意味を再創造する方法になる」(同、321)とも述べている。彼女の視点が、「中心は一つではないという世界観を礎に、周縁の存在と小さな物語に光を当てていくポストコロニアル文学の中で、新しい女性像を構築し、主体的で自己実現を達成する女性の姿を描き出していく女性作家たちが、他者の存在を高らかに宣言して単一的な価値観と階層を強いる社会構造に挑戦している」(同、423) 文学の可能性を照射したといえる。Boehmerにとって、文学の存在は、自己と世界の境界にたつてその二つの領域を繋ぐかけがえのない「言語」空間なのだ。

自身が作家として言葉を生み出す創作の過程は、彼女が論文の中で言う「間テキスト性」をとりこんだ人間の姿を創出していく過程であると同時に、

エッセーでの「翻訳」という自身の言葉の模索にちがいない。最新刊の小説 *Sharmilla, and Other Portraits* (2011) は、17編の短編を通して万華鏡のような「他者」との邂逅を描き出す。南アフリカで過ごした少女期の「自分」が、「色の違う」少女の孤独な意識に掬いとられるかと思えば、娘の教育のために懸命に働くシングル・マザーのたくましさや、エイズに冒された人間の「アウトサイダー」の視点を通して、変わりゆく南アフリカの内側に生きる人間たちの心の襞に分け入っていく。その群像は、ときにポストコロニアル文学の作家たちが描き出す人間たちの姿と重なり合い、その間テキスト性の空間に時代そのものの像を結ぶ。一方で、Boehmerは、自身の子ども時代をその中に探しているようにもみえる。文学の読み手としての彼女は、同時にその書き手でもある。それは他者の言葉を受け取り、その言葉が彼女の内側にあった言葉を引き出して、新たな応答が始まる瞬間に生み出された言語空間でもある。自己と世界の境界を、Boehmerは独自の方法で繋いで見せたのだ。

「ここでもそこでもない」独自の立ち位置から、自己と世界の境界で文学と向き合う経験を経て、Boehmerはとてもユニークな「世界文学者」のモデルの一人となった。Oxford大学の数少ない女性教授の一人として、彼女がこれからどのような仕事を展開していくのか、それは英文学研究の未来にも繋がっている。ちなみに、今一番したいことは何かを問うた私に、彼女は「書評」だと答えた。文学に向き合い、それを独自の視点から読み解く行為から、また新たな領域が拓かれていくことだろう。

注

- (1) Eva Hoffman については、「『他者』を語ることば：翻訳論の現代的課題」(『津田塾大学紀要』第42号、2010、46-69)を参照。
- (2) J.M Coetzee, *Boyhood: Scenes from Provincial Life* (London: Secker and Warburg, 1997), 129.
- (3) 2011年3月10日。Oxford大学Wadham Collegeで行われたPostcolonial Seminarにて、筆者との雑談の中でElleke Boehmerは「文学の力」について語った。その会話の中で、父の死に際して文学の力に深い共感をおぼえ、文学専攻に転向した経緯を語ってくれた。“Here nor there”は、そのときに彼女が筆者に贈ってくれた「思い出の贈り物」である。

引用文献

Boehmer, Elleke. “Mothers of Africa: Representations of Nation and Gender in Postcolonial African

- Literature.” A thesis is submitted by Elleke Deirdre Boehmer, St.John’s College, Oxford, for the degree of Doctor of Philosophy, MichaelmasTerm, 1990.
- . *Screens Against the Sky*. London: Bloomsbury, 1990.
- . *An Immaculate Figure*. London: Bloomsbury, 1993.
- . *Colonial and Postcolonial Literature: Migrant Metaphors*. Oxford: OUP, 1995.
- . *Bloodlines*. Cape Town, David Philip Publishers, 2000.
- . *Empire, the National, and the Postcolonial, 1890-1920*. Oxford: OUP, 2002.
- . *Stories of Women: Gender and Narrative in the Postcolonial Nation*. Manchester: Manchester UP, 2005.
- . *Nile Baby*. Banbury: Ayebia Clarke Publishing, 2008.
- . *Nelson Mandela: A Very Short Introduction*. Oxford: OUP, 2008.
- and Stephen Morton. Eds. *Terror and the Postcolonial*. Oxford: Wiley Blackwells, 2010.
- . *Sharmilla, and Other Portraits*. Sunnyside: Jacna Media, 2010.
- and Rosinka Chaudhuri. Eds. *The Indian Postcolonial A Critical Reader*. London and New York: Routledge, 2011.
- Coetzee, J.M. *Boyhood: Scenes from Provincial Life*. London: Secker and Warburg, 1997.
- Hoffman, Eva. *Lost in Translation: A Life in a New Language*. New York: Dutton, 1989.